

シロナガスクジラ 南極海・南半球

Blue Whale, *Balaenoptera musculus*



Photo by F. Kasamatsu

南極海での通常型シロナガスクジラ (Photo by F. Kasamatsu)



Photo by H. Kato

オーストラリア南岸沖を泳ぐピグミーシロナガスクジラ (Photo by H. Kato)

管理・関係機関

国際捕鯨委員会 (IWC)

利用・用途

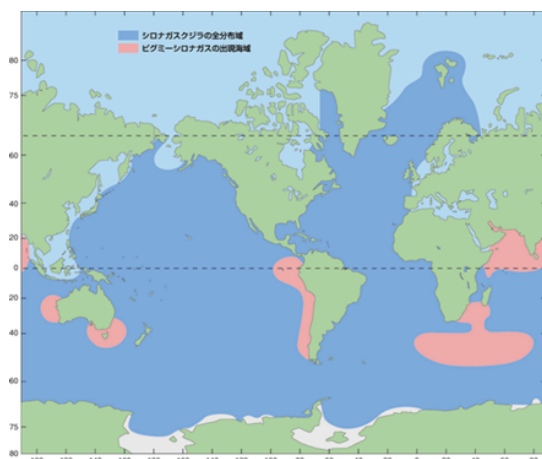
刺身、鯨油など

生物学的特性

- 世界に3亜種：南北の各半球の通常型、南半球の矮小型ピグミーシロナガスクジラ
- 体長・体重：20～34 m（上顎先端～尾鰭分岐点）・80～190 トン
- 寿命：110～120 歳
- 成熟開始年齢：10 歳頃
- 繁殖期・繁殖場：冬・低緯度海域
- 索餌期・索餌場：夏・南氷洋
- 食性：オキアミなど
- 捕食者：シャチ

漁業の特徴

本系群は、南極海における近代捕鯨（捕鯨砲を使った捕獲）がノルウェーによって開始された 1904 年から主要な対象種として捕獲された。その後、1924 年に誕生した母船式捕鯨により漁場が拡大し、1920 年代後半～1930 年代に捕獲の隆盛期を迎え、1930/1931 漁期には史上最高の 41 船団（ノルウェー、英国、オランダ、ソ連、南アフリカの 5 か国）が出漁して捕獲数のピークを記録した。日本も 1936/1937 漁期から南極海捕鯨に参入した。その後、第二次大戦中は停滞したものの、戦後間もなく復興し、これらの国々によって捕獲が続けられた。大型鯨類捕鯨業の管理は、第二次大戦以前はなされていなかった。大戦以後、IWC によって BWU 単位制度（シロナガスクジラ換算制度）が導入され、本種の産油量を基準に各鯨種の捕獲頭数が定められたが（1946～1971 年）、資源状況の悪化に伴い、1964/65 漁期から南極海における本種の捕獲が禁止された。さらに 1982 年に IWC で商業捕鯨モラトリウムが採択され、以降、全海域における本種の商業捕鯨が停止されている。





通常型（青色）、ピグミーシロナガスクジラ（桃色）の分布図

漁獲の動向



1910 年代～1920 年代前半は、南極海で年間数千頭レベルの捕獲が行われていたが、1920 年代後半に 1 万頭を超えて急増し、1930/1931 漁期には過去最大の 28,325 頭を記録した。1940 年代前半の第二次大戦に伴う減少、休漁の後、捕獲が再開し、1940 年代後半～1950 年代初めは 5 千～8 千頭が捕獲された。その後、資源の減少に伴い、捕獲数は減少し、1960 年代初めには亜種のピグミーシロナガスクジラを合わせても千頭前後にまで減少した。1964/65 年漁期以降は捕獲が禁止された。

資源状態



本系群は最も資源が減少した系群の一つである。2008 年の IWC 科学委員会において、本系群の包括的な資源評価が実施され、1904 年時点の初期資源量は 256,000 頭と推定され、1971/72 漁期までに 395 頭（初期資源の 0.15%）まで減少したこと、以降は年率 6.4% で増加し、1997 年時点の資源量は 2,280 頭（初期資源の 0.9%）であることが合意された。捕獲停止後約 50 年経過したが、資源量は初期資源の 1% 以下のレベルに過ぎず、資源水準は依然として極めて低いと判断される。資源の回復が進んでいない要因には、同じ餌種を利用するなど、本系群と生態的競合の関係にあるクロミンククジラの台頭もあると考えられており、本系群の回復に向け、鯨種間の競合関係を更に明らかにする必要がある。



Type A



Type B



Type C

亜 種	頻 度		
	TypeA	TypeB	TypeC
ビッグミー	17	7	1
シロナガス	0	12	0
Chi-square	Chi-square=16.8253, P=0.00002		

シロナガスクジラとビッグミーシロナガスクジラの鼻孔形態の亜種間比較

管理方策

IWC により商業捕鯨のモラトリウムが継続されている。IWC は管理対象資源の包括的資源評価を実施している。本系群については、2006 年から同作業が開始され、2008 年に開催された同年次会合において終了した。また、IWC において 1996 年から実施されてきた本系群を含む大型鯨類を対象とした南大洋鯨類生態総合調査（SOWER）による目視調査が、2009/10 漁期の調査をもって終了した。現在、IWC/SC では、ビッグミーシロナガスクジラの資源評価に向け、系群構造の検討といった準備作業が進められている。通常型シロナガスクジラについては大きな動きはないが、近年の調査から得られた新たな知見の検討が行われている。今後の本種の資源評価には、日本の南極海調査で副次的に得られる本種の分布、個体識別データの活用による貢献も期待される。

1928 年から 1986/87 年までの南極海母船式捕鯨によるシロナガスクジラ（濃青色）捕獲頭数の変遷、1987/88 年以降は調査による標本採集数の変遷

シロナガスクジラ（南極海・南半球）の資源の現況（要約表）	
資源水準	極めて低位
資源動向	年率 6.4% で増加
世界の捕獲量（最近 5 年間）	なし （商業捕鯨モラトリウムが継続中）
我が国の捕獲量（最近 5 年間）	0 頭
管理目標	商業捕鯨モラトリウムが継続中であり、未設定
資源評価の方法	ロジスティックモデルを用いた個体群動態解析（Branch 2008）により資源動向を把握
資源の状態	1997 年時点で 2,280 頭であったことが IWC で合意
管理措置	商業捕鯨モラトリウムが継続中
最新の資源評価年	2008 年
次回の資源評価年	未定

Copyright (C) 2018 水産庁 水産研究・教育機構 All Rights Reserved
53S - 2